様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：３２６６５
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2017
課題番号：２６７７００５０

研究課題名（和文）絵画に描かれた陶磁器―18世紀フランスの愛国的美術趣味

研究課題名（英文）Porcelain in Painting: Tastes in French Art and Porcelain in Eighteenth Century France

研究代表者
船岡　美穂子（FUNAOKA, Mihoko）

日本大学・芸術学部・研究員

研究者番号：９０５９７８８２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、18世紀フランスで制作された肖像画、風俗画、静物画の画中に描かれた陶磁器の表現を研究対象とし、それらがなぜ、いかなる意味をもって絵画に描かれたのかを解明し、絵画および陶磁器の受容の諸相も明らかにしようとするものである。成果として、東洋磁器、サン=クルーやシャンティイをはじめとするフランス製の軟質磁器、そしてセーヴル磁器は、それぞれの磁器の種類・価値によって絵画の中での描かれ方と意味が異なっていたことが新たに明らかになった。また、いくつかの事例において、自国美術を愛好する趣味とのつながりを示すことができた。

研究成果の概要（英文）：From the end of the seventeenth century, French porcelain manufactories began to produce porcelain under the stimulus of their interest in and admiration for exquisite Chinese and Japanese porcelains. French painters of the time also represented diverse porcelains in their paintings, mostly portrait, genre and still-life works.
This study endeavors to show why and how porcelains were depicted in paintings, and the meanings they were intended to convey. Aspects of how the paintings and porcelains were received at the time are also examined. The research reveals that painters or their patrons chose porcelains according to their kind of manufacture, whether Oriental porcelain, Saint-Cloud, Chantilly, or Sevres, and the value they held as such. In some instances, a connection could be shown between the porcelains depicted and concurrent tastes in French art.

研究分野：美術史

キーワード：18世紀フランス　美術史　美術愛好家　陶磁器　サン＝クルー　イギリス趣味　オルレアン公　カルモンテル

１．研究開始当初の背景

ヨーロッパでは、13 世紀に東洋磁器がもたらされて以来、陶磁器が珍重されて、各国で製造の試みが繰り返された。フランスでは 17 世紀末から 18 世紀半ば頃にかけて、陶磁器の製造技術が飛躍的に発達し、自国での生産が可能となった。シャンティイ、サン＝クルー、ストラスブールといった窯で優れた製品が作られてゆく。こうした陶磁器は、王侯貴族のほか、豊かな上流市民が買い求めていったとされている。

本研究が特に着目したのは、洗練された生活を彩るものとして、こうした陶磁器が日常生活を描いた風俗画や食卓風景を描写した静物画といった絵画作品にもよく描かれるようになっていった点である。ブーシェやシャルダン、ランクレ、デポルトといった、今日も 18 世紀を代表すると評価されている画家が、多くの作品を残している。

西洋陶磁器史の先行研究においては、ル・デュック（1996）の研究が示してきたように、フランスでは 18 世紀半ば頃からの陶磁器技術の発展の過程が辿られ、文様を中心とした様式の発展や製品の同定に力が注がれており、一定の成果が挙げられた。また、絵画に描かれた陶磁器の同定について言えば、部分的に行われているが、陶磁器製品とそれが描かれた絵画の制作時期が重なる傾向が認められている。このように、描かれた陶磁器の同定の点ではある程度の成果が挙げられているが、陶磁器の愛好家と絵画作品の愛好家の相違、受容の諸相は調査されていない。

一方、18 世紀フランス絵画史研究では、風俗画と静物画に描かれた陶磁器のもつ図像学的あるいは社会的な意味についてほとんど考察されておらず、贅沢な品々による富や豊かさの誇示として漠然と解釈されてきたに過ぎない。お茶やコーヒーといった新たな嗜好品の絵画表現に着目した展覧会においても、絵画に描かれた陶磁器の研究はそれほど進められていない。フランス国内でも生産されるようになった陶磁器が、なぜ盛んに絵画に描かれるようになったのか、また陶磁器そのものの愛好と、それを描いた絵画の愛好との関連性もこれまで明らかにされていない。

２．研究の目的

本研究は、これまでほとんど注目されてこなかった、絵画における陶磁器の表象をテーマとし、陶磁器および絵画の受容のありかたと広がりを明らかにしようとしたものである。肖像画、風俗画、静物画において、どのような種類の陶磁器が画中に描かれる傾向にあるのか、またそうした陶磁器が描かれた理由やこめられた意味、陶磁器の愛好者・所蔵者と絵画作品の所蔵者の相違を調査研究することを目的とした。また、18 世紀後半のフランスの美術界で目立つようになる、自国美術を愛好する趣味とのつながりを解明しようと試みた。

３．研究の方法

陶磁器が描かれた 18 世紀フランスの肖像画、風俗画、静物画を中心とした現存する絵画作品、および東洋磁器、フランスの軟質・硬質磁器をはじめとする陶磁器作品の実見調査を実施した。作品調査は、フランスを中心とした海外の美術館や特別展覧会で行い、一次史料や二次文献の調査は、国内外の図書館、資料室、古文書館で実施した。

18 世紀フランスを中心とした陶磁史文献の読解を進めつつ、絵画作品にモティーフとして描かれた陶磁器の種類と時代に伴う変化を検証した。対象は主にフランスの磁器が中心となったが、フランス製の磁器が本格的に製造されはじめる時期と重なる 17 世紀のフランス絵画に描かれた東洋磁器もあわせて調べた。画中の陶磁器の同定の問題について言えば、基本的には先行研究の同定に従うこととし、東洋磁器、フランスの軟質磁器（サン＝クルー窯、シャンティイ窯）、セーヴル磁器の分類を行い、その傾向を検討した。先行研究がなく、新たに同定が必要となった事例では、国内外の西洋陶磁・工芸研究の専門家の意見を仰ぎながら行った。

また、美術愛好家の傾向を検証するため、陶磁器と、陶磁器が描かれた絵画作品の 18 世紀の所蔵者・受容者の傾向を分析した。肖像画の場合は、モデルとなった人物の調査・考察も合わせて行った。

４．研究成果

18 世紀フランス絵画に描かれた陶磁器は、主に次のように分けることができる。東洋の陶磁器、フランスの軟質磁器、硬質磁器である。そこで以下では、この分類に沿って、(1) 東洋磁器、(2) 軟質磁器のサン＝クルー窯、(3) 軟質磁器のシャンティイ窯、(4) 硬質磁器のセーヴル窯の順に、調査研究の成果をまとめる。

(1) 東洋（中国・日本）の陶磁器

研究開始当初は、本研究代表者がこれまで行ってきた 18 世紀絵画研究および予備調査から、他の画家の絵画作品においても、フランスの磁器製造の発展に伴い、東洋磁器が描かれなくなっていったとの仮説を立てた。しかし、調査の結果、清朝の青磁や日本の柿右衛門をはじめとする東洋磁器そのものが、継続的に愛好・珍重されて 18 世紀を通じて肖像画や風俗画、静物画に描かれたことが判明した（雑誌論文②、学会発表①・②）。

また、描かれ方について言えば、実際に使用する場面としてではなく、装飾品や鑑賞品として展示・陳列した様子を描く傾向が強いことが明らかとなった（図 1）。特に、暖炉上を飾るモティーフとして用いられる例が散見され、静物画ではトロンプルイユのように描かれている場合が多い。富の表象や、肖像

画のモデルの趣味の良さを表現する機能のほか、17 世紀のオランダ絵画にしばしば見られるように、実物の磁器の代用としての役割も果たした可能性を指摘した。

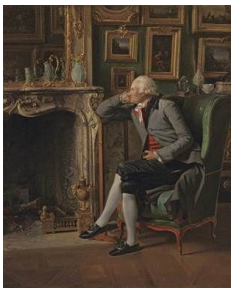

図 1　ダンルー《書斎のブーザンヴァル男爵》

（2）サン＝クルー窯

サン＝クルー窯は、1678 年にピエール・シカノーがパリ郊外のサン＝クルーに開窯し、軟質磁器の焼成に成功して 1702 年に特許を得た窯である。この地に城と領地を所有していたオルレアン家のフィリップ 1 世と 2 世（摂政）のもと、黎明期から 18 世紀半ばまで庇護を受けて発展したが、1773 年に閉窯している。

ヴェルサイユ宮殿には、磁器の城（現存せず）が建造されて、中国磁器とともにサン＝クルーの磁器も展示されており、絵画においてもまた、開窯まもない 17 世紀からこの窯の磁器がフランス絵画の中に描かれてゆく。

サン＝クルーの磁器は、18 世紀を通じて、肖像画、風俗画、静物画によく描かれており、王侯貴族や裕福な市民の贅沢な日用品として、画中の人物像が手に取る姿が描写されることもある。しばしば、絵画作品よりも製造時期が古い磁器が画中に描かれる事例も散見された（図 2）。本研究では、特にカルモンテルの水彩素描による肖像画作品群を集中的に調査し、描かれた磁器の同定も行った。このオルレアン家ゆかりの肖像画作品（図 2）について言えば、肖像画のモデルとなった人物のアトリビュートとしての機能を有し、フランス磁器を誇る趣味が認められた。また、絵画作品の年代よりもかなり製作年代をさかのぼる時期であることから、オルレアン家をめぐる懐古的な意味も解釈できる（雑誌論文③・④、学会発表③-⑤）。

図 2　カルモンテル《ブフレール伯爵夫人》

（3）シャンティイ窯

シャンティイ窯は、1725 年、コンデ公ルイ＝アンリ・ド・ブルボンによって設立された。乳白色の柔らかな肌合いと繊細なデザインによって、ロココ初期の軟質磁器を代表し、1740 年頃までは、柿右衛門を高い品質で模した日本風の絵付けで名高い。18 世紀中ごろ以降、ヴァンセンヌ窯、セーヴル窯に押されて 1800 年に閉窯した。

シャンティイ窯の陶磁器は、管見の限りでは、静物画作品に多く見られる傾向にあることが判明した。画中では、軽食や食事に関連するモティーフとともに食卓の上に配置して描かれており、湯気がたつ飲み物を入れた状態での描写は、実際の使用を想起させるものである。サン＝クルー窯の磁器の場合と同様に、王侯貴族や裕福な市民の贅沢な日用品として描かれることが多い。以上のことから、サン＝クルーやシャンティイをはじめとするフランスの軟質磁器は、身近な室内環境の中で実際に使用されている姿として表現される傾向が認められる。このことは、室内装飾や展示品として描かれることが多い東洋磁器とは異なる特徴であると言える。

また、こうした軟質磁器が描かれた絵画作品の所有者もまた、裕福な貴族や上流市民が多く、軟質磁器の愛好者層と重なる傾向にある（雑誌論文②、学会発表①・②）。

（4）セーヴル窯

セーヴル窯は、ヴァンセンヌ王立磁器工場のセーヴル移転に始まり、1745 年に磁器製造の特権を得て、1759 年に王室に帰属した。ポンパドゥール夫人の庇護の下、1768 年までは軟質磁器が生産され、やがて 1769 年には、フランス産のカオリンの発掘が可能になったことにともない、硬質磁器の焼成に成功した。様々な色鮮やかな色釉が開発されて、フランスらしいデザインが生み出され、現在に至るまで、優れたデザインと技術によるフランスの高級磁器を代表する存在である（雑誌論文①）。

セーヴルでは、「ブルー・セレスト」、「ブルー・ラピス」、「グロ・ブルー」、「ローズ・ポンパドゥール」、「黄水仙の黄」、「濃緑」など多様で色鮮やかな色釉が発明され、ロココ様式や新古典主義を反映した、華麗なフランスらしい多様なデザインの磁器が数多く制作されたが、絵画に描かれることは極めて稀であった。このことは、他のフランスの窯の陶磁器とは大きく異なる点である。

だが、例外的な作品として、ヴァレイエ＝コステルが描いた作品がある（図 3）。本研究では、ロラン＝ミシェル（1970）による先行研究を手がかりとして、ヴァレイエ＝コステルの描いた花器のセーヴル磁器への具体的な同定を試み、調査を進めた（雑誌論文⑤）。一方、ヴァレイエ＝コステルは、セーヴル磁器に限らず、青い無地の花瓶を数多く描いている。本研究では、この点に着目し、この画

家が、青い花瓶を頻繁に選択した背景には、画中の色彩効果に加えて、花卉画ではラピスラズリの花器を描く絵画伝統があったことを新たに指摘した（雑誌論文⑤）。17 世紀頃から続くこの絵画伝統は、18 世紀にもその継承を認めることができたためである。また、画家のセーヴル磁器の入手経路の可能性についても、新たな知見を得ることができた。

図 3　アンヌ・ヴァレイエ＝コステル《花と財布》

以上、研究開始当初は、東洋磁器が絵画作品に描かれることが少なくなってゆくと仮説を立てたが、調査を進めた結果、東洋磁器は 18 世紀を通じて継続的に愛好され、絵画の中では、実際に使用されるものとしてよりも、珍重されて陳列棚や暖炉の上に展示されて、室内装飾として用いられた状態で描かれる傾向にあったことが判明した。その希少性から、実物の代用としての機能も有していた可能性も明らかとなった。

一方、フランスの軟質磁器（サン＝クルー窯、シャンティイ窯）について言えば、食卓や化粧台といった関連するモティーフとともに画中の人物像が使用している様子が描かれることが多い。そのため、所有したり使用したりする人物としばしばつながりを持ち、意味がこめられていることもあった。

最後に、セーヴル窯の磁器は、絵画に描かれることが極めて稀であった。このことは、この磁器の受容層が極めて限定されていたことと無関係ではなかったと考えられる。例外的な事例として、アンヌ・ヴァレイエ＝コステルによる花卉画の調査研究を進めた。この画家が、とりわけ青いセーヴル磁器をモティーフとして選択した要因には、17 世紀以来のラピスラズリの壺をモティーフとする絵画伝統があったと結論付けた。磁器の選択においても、絵画伝統の慣習的な図像に従う場合があったと言える。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　５件）

①船岡美穂子、「フランス宮廷の磁器：セーヴル、創造の 300 年“マリー・アントワネットから草間彌生へ”展」、『18 世紀学会会報』、査読無、第 33 号、2018 年（展覧会評）（印刷中）

②船岡美穂子、「18 世紀フランス絵画に描かれた陶磁器」、『日本大学芸術学部日本大学研究員研究報告書』、査読有、第 17 回、2018 年、（印刷中）

③船岡美穂子、「カルモンテル研究―水彩素描の肖像画作品に描かれた陶磁器をめぐって」、『日本大学芸術学部日本大学研究員研究報告書』、査読有、第 16 回、2017 年、59－65 頁

④船岡美穂子、「カルモンテル作　《ブフレール伯爵夫人》―18 世紀後半のフランスにおけるイギリス趣味と喫茶―」『Aspects of problems in Western Art History (東京芸術大学西洋美術史研究室紀要)』、査読無、vol. 14、2016 年、81-92 頁
https://geidai.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=790&item_no=1&page_id=13&block_id=17

⑤船岡美穂子、「アンヌ・ヴァレイエ＝コステルの花卉画と青い磁器の花瓶」、『Aspects of problems in Western Art History (東京芸術大学西洋美術史研究室紀要)』、査読無、vol. 12、2015 年、29-40 頁
https://geidai.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=589&item_no=1&page_id=13&block_id=17

〔学会発表〕（計　５件）

①船岡美穂子、「18 世紀フランス絵画に描かれた陶磁器」日本大学研究員報告会（ポスター報告）、日本大学芸術学部江古田校舎、2018 年

②船岡美穂子、「18 世紀フランス絵画に描かれた陶磁器」合同研究発表会、日本大学、2018 年

③船岡美穂子、「18 世紀フランス絵画と陶磁器－カルモンテルの肖像画作品」日本大学研究員報告会（ポスター報告）、日本大学芸術学部江古田校舎、2017 年

④船岡美穂子、「カルモンテル作　《ブフレール伯爵夫人》―18 世紀後半のフランスにおけるイギリス趣味と喫茶―」、合同研究発表会、大阪、常光円満寺、2016 年

⑤船岡美穂子、「18 世紀フランス絵画に描かれた陶磁器－カルモンテルの肖像画作品」、合同研究発表会、日本大学、2016 年

６．研究組織

(1)研究代表者

船岡　美穂子（FUNAOKA, Mihoko）
日本大学・芸術学部・研究員
研究者番号：90597882